SHINCLUB 180

(株)辰　東京都渋谷区渋谷3-8-10　JS渋谷ビル5F　tel/03-3486-1570　fax/03-3486-1450

「日本キリスト教団　生田教会」 撮影：アック東京

今月のトーク/monthly talk

パブリック

写真は、新しく川崎市多摩区に完成した、プロテスタントの教会です。個人的には、教会の礼拝堂というと、威厳のある、閉じた厳かな空間というイメージがあったのですが、この建物はとても開放感にあふれたものになっています。それは、宗派の違いもあるでしょうが、この教会の活動方針を表したものにほかなりません。

献堂式（竣工式にあたる）で、牧師様は「教会創立 12 周年を迎えた 1965 年 5 月に以前の会堂を献堂し、45 年が経ちました。老朽化、耐震問題も出てきて、今なら新しい会堂を建設できると決断しました」と振り返られました。建物完成に向けて建築委員会を設置し、新しい教会にどのような機能を盛り込むか、設計事務所と 4 年近くの設計期間を通して話し合い、思いを結実されました。

日頃から教会の中だけではなく、積極的に一般の方への奉仕活動や地域活動を行っている教会員の方たち。そのような活動をより充実させるためにどのような建物が望ましいのか。

「打ち合わせでは建物のデザインなどへの要望はなく、機能についてだけでした」と設計の西沢立衛氏。その要望も、「教会単体だけでなく、地域全体の中でどうあるべきか」という点に向けられたものだったそうです。公共の建物の設計機会も多い西沢氏ですが、今回は真の意味で「パブリック」な建物だったという実感を持ったそうです。

「パブリック＝public」は辞書で見ると、「国民全体の、一般大衆の、公衆の、公共の」という訳が載っています。日本では、国全体を考えるとき、欧米に比べて、まだまだこの「公共の」という意識が低い気がします。何か、国全体になるように考えるのは、「お上」に任せておけばいいという意識の人が少なくないのではないでしょうか。逆に、コミュニティに入れない人には、存外冷たいこともあります。パブリックとは、もっと大きな、普遍的な意識を持つことです。外人だろうが、子供だろうが、大人だろうが、誰から見ても、正しいと思えるところに最終的に価値を置いているところに意義があります。

公共の建物は、発注者である行政と利用者が別の場合が多いのですが、往々にして「ハコだけ用意したけれども、利用者が少ない、不便だ」という話になりがちです。そこで最近では、行政が立案の段階から市民団体や地域の活動組織に、建設への参加を呼びかけることも多いと聞きます。

今回は民間の建物ではあるものの、宗教を通じて社会貢献をするという目的がきちんと皆様に共有されていて、「施工者冥利につきるものでした」と弊社社長森村は、献堂式で述べました。

自分に同調しない者への不寛容が、世界中で顕著になっていると感じます。日本人は、元来、親切で従順で、他人に寛容な国民性を持つと言われていましたが、個人が前に出ない反面、昔に比べて、たとえ近くに救いが必要な人がいても「注意を払わない、おせっかいをしない」という距離感が感じられるようになりました。特に都会ではその傾向が強いでしょう。しかし、これから大人になっていく子供たち、高齢者、経済的弱者などに対し、信頼に足る大人としての振舞を忘れたくないものです。

教会やお寺などは、本来救いを求めてくる人のための施設です。今後、その役割はどんどん大きくなってくることでしょう。そんな時に、誰もが気軽に立ち寄れる、開かれた建物がそこにあることで、さらに１人でも多くの方が救われたらと願わずにはいられません。

日本キリスト教団　生田教会

地域に開かれた教会建築とは

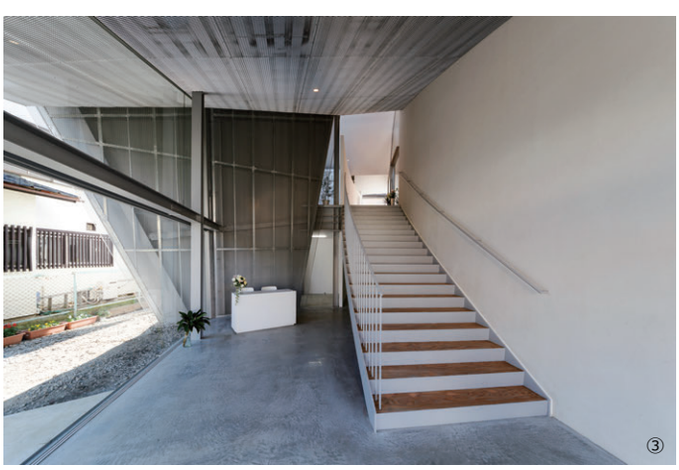
神奈川県生田の住宅地に建つ、プロテスタント教会のプロジェクトである。

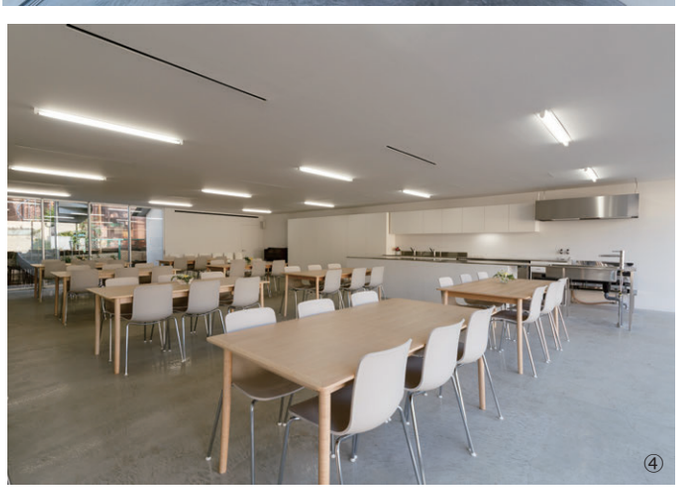
この計画は、旧会堂の建替え計画で、要望として礼拝堂のほか、大きな集会室、事務室、牧師室、庭、駐車場用地などが求められた。その後、駐車場の用地を最大限確保したいという要望から諸機能を２階建てに納めることが与件となった。

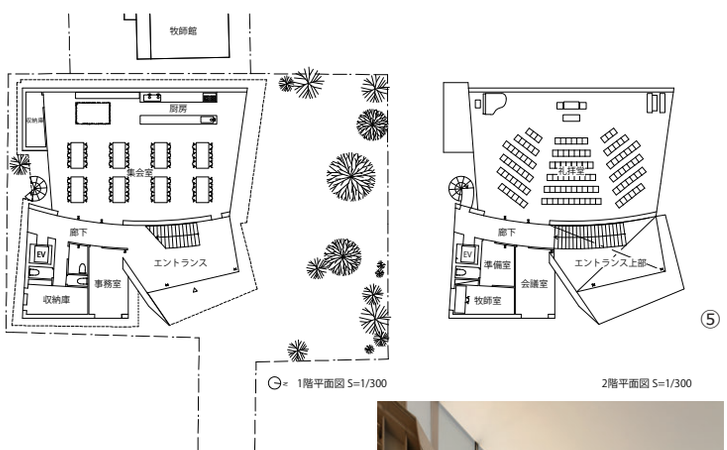
新しい会堂は、一階に集会室とエントランス、事務室、２階に礼拝堂と牧師室、会議室を持つ。配置としては、かつて庭であった南半分の場所に建つこととなった。その結果、旧会堂が建っていた北側がアプローチと駐車場を兼ねた庭となって、会堂と庭の関係が反転する配置となった。

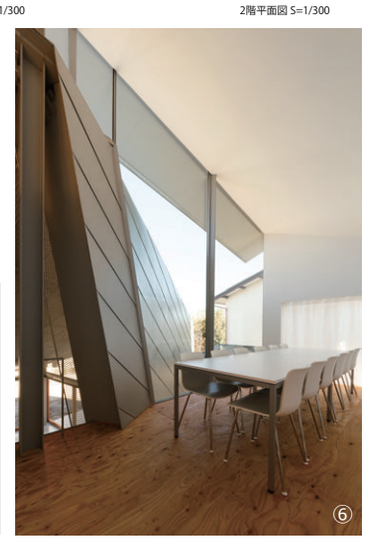
建物の構成上、集会室と礼拝堂という２つの大空間を積層する必要があり、それらを普通に積むとたいへん大きくなるので、ここでは屋根傾斜をつけて軒高を低くして、また建物全体を柔らかく３つの棟屋に分けてスケールを抑えて、住宅地を圧倒しない佇まいを目指した。分節された３つの棟屋は、その空間規模や室内機能、周囲との関係などから、おのおの違う形となった。たとえば礼拝堂は、聖壇を中心とした対象的切妻勾配屋根の室であり、妻側を東に向けて朝日を取り込むとともに、屋根中央を切り開いて上方から光を取り入れる形とした。エントランスは、道路、庭、室内というアプローチをスムーズなものにするために、エントランス棟屋全体の角度を振って、道路へ正面する形とし、常に開かれうるような大きな引き戸を設けた。集会室は、外と地続きの開かれた空間で、人々の活動や交流が外からも感じられる空間とした。そのようにさまざまなやり方で建築内外の連続感、住宅地との調和を考えた。建物も庭も、これからいろいろな人に使われて教会の活動に合った、開放的で公園のような場所になっていくことを期待している。

（西沢立衛／西沢立衛建築設計事務所）









所在地：川崎市
構造：Ｓ造
規模：地上２階
用途：教会
設計：西沢立衛建築設計事務所
施工担当：岩本、村田、川崎、大場
竣工：2014年９月
撮影：アック東京

①勾配屋根の最上部と東側上面にトップライトが開かれた礼拝堂②アプローチからエントランス棟を見る③エントランス。２階の礼拝堂への階段の裏側が集会室への廊下④１階集会室。大きなキッチンもついており、建物北側に向かって、ガラスの引戸で繋がる⑤建物平面図⑥2 階会議室

日本の建築、ヨーロッパの建築　　西沢立衛／西沢立衛建築設計事務所

Ryue Nishizawa

西沢立衛氏　事務所にて　　撮影：アック東京

―今月は、「生田教会」の設計者、西沢立衛氏にお話を伺いました。妹島和世氏と「SANAA」を設立されたのが 1995 年。以来、日本建築学会賞 3 度受賞、ベネツィア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞ほか内外での受賞作品も多く、2010 年には、建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞も受賞されています。海外でのお仕事も多い西沢氏に伺いました。

―海外でのお仕事では、日本のようにゼネコンが施工を担当するのですか。
西沢：基本はそうですが、例外もあります。「ルーブル・ランス（ルーブル博物館の別館）」という美術館では、ゼネコンなしでした。分離発注です。各サブコンと直接契約で工事をするので、大変でした。
　スイスで学生会館の設計をやったときは、ゼネコンは施工だけでなく、設計と施工、運営のすべてを発注者から請け負うというものでした。ということは我々建築家も、ゼネコンの下請けになりますので、どこかデザイナー化してしまう部分があります。それは最近の世界的傾向ではないかと思います。発注者の消費者化が進んでいるとも言えます。昔のクライアントは建築に詳しかった。直接大工とやりとりするわけです。知識がないと発注はできなかったし、逆に言えば建築発注すると専門家と渡り合うことになるので、いろいろ勉強することになる。自然に詳しくなってしまうのかもしれません。しかし今は、逆に建築を知らない人が発注できるシステムになっていると思います。その一つがスイスの時のような、パッケージ発注といいますか、ゼネコンにすべて丸投げするというものです。これは善し悪しで、良い所は、より責任の所在がはっきりしていることです。すべての責任はゼネコンにあるとすると、消費者にとってわかりやすい。ゼネコンとしてもやりやすいかもしれない。ルネサンスは、施工も設計も全部一緒でしたから。他方で問題は、設計の質が落ちるということで、設計と施工を比べると施工のほうが圧倒的に発注額が大きいので、どうしても物の考え方が施工中心になります。悪い工務店がそういう仕事を請け負うと、建築事業がビジネス化していく。発注側も、一括発注の方が経済的だという理解ですから、やはりものづくりというよりお金儲けに流れていく傾向はあると思います。
―建築家がやりにくくなる、ということですね。
西沢：とても創造的な工務店と組むのなら、面白いでしょうね。生産効率、利潤も重要な問題ですが、ものづくりの意味を忘れて走り始めると、建築としての豊かさ、文化性は犠牲になっていくでしょう。経済一辺倒ではない、ものづくりを意識していかないとダメだということですね。
西沢：　日本の建築の個性というのは何なのかなと考えると、ひとつはヨーロッパと比較するとわかりやすいような気がします。ヨーロッパの建築は、すごく物質的なところがあります。建築物がものとして永遠に残る世界です。建築は記念碑なのです。日本の建築は、軽いというか、どこかで物質的側面よりも、精神的というのでしょうか、形ではない、精神的で宗教的な部分が強いように思います。伊勢神宮遷宮のように、建築は物として残らないけど、精神が残り、技術が残る、というところがある。ヨーロッパの物質性は、建築の作り方にも現れています。日本人の仕事は、細かく、きれいで勤勉で、ディテールへのこだわりはすごいものがありますが、でも建築全体となると、それほど力がない。ヨーロッパの建築の物質性というのは、作り方が足し算的というのか、彫刻的な感じがします。粘土の彫刻のように、どんどん肉付けしていくような感じです。ローマは旧時代の瓦礫の上に新時代の建築を作ってきたので、地面が１００年に１ｍ上がっていくのです。まさに足し算の歴史です。コルビュジエの建築も、たとえばラトゥーレットのように、四角い建築の右に全然違う形の建築をくっつけるというような、足し算的な荒々しさです。ヨーロッパの建築を見る度に感じる驚きというのは、まさに現在進行形のものづくり、その野蛮さです。その建築の迫力はヨーロッパのどれだけ小さい住宅でも、ものすごく人間的なものに感じられます。
―「人間的」というのは？
西沢：気持ちが出ているというか。日本の優れた職人は機械のような精密な仕事をする。でもイタリアで優れた職人というものは、自分の個性をいかに出すかで、機械のような仕事をしたらそれは職人生命の終わりです。自分の肉声そのもののような仕事をしなければ、職人としては決して認められません。ミケランジェロのダヴィデは、上に行くにしたがってどんどん大きくなっていきますが、ああいう表現です。そうやったほうがダヴィデの迫力に近い物が作れるはずだ、というもので、ミケランジェロの気持ちがものすごく出たものです。正確さよりは、表現としての激しさですね。イタリア料理も、シェフが朝奥さんとケンカして、その日の夜、そのお店でアラビア―タを注文しようものなら、辛くて辛くて、たいへんです。人間的だから、怒りがそのまま作品になる。翌日はまた味が違って、全体として勢いがあり、生命的で、イタリア料理っていいな、となる。芸術というのは人間のもので、人間のエモーションが出るダイナミズムです。ヨーロッパの芸術のありかたはやはり個人主義者で人間が中心という気がします。日本は、個人主義というのはあまり感じなくて、むしろコミュニティ中心なのか、自然中心なのか、何が中心なのかよくわかりませんがとにかく個人というものは中心に置かれていません。社会主義的な、コミュニティ的ものづくりの世界です。
―本日は、どうもありがとうございました。

「ヨーロッパの建築は大きな建物に迫力がある。足し算で肉付けしていく力が違う」

西沢立衛

建築家。横浜国立大学大学院建築都市スクール Y-GSA 教授。1966 年東京都生まれ。1990 年横浜国立大学大学院修士課程修了、妹島和世建築設計事務所入所。
1995 年妹島和世と共に SANAA 設立。1997 年西沢立衛建築設計事務所設立。

主な受賞に日本建築学会賞、村野藤吾賞、藝術文化勲章オフィシエ、ベルリン芸術賞 *、プリツカー賞 *

主な作品に、ディオール表参道 *、金沢 21 世紀美術館 *、森山邸、House A、ニューミュージアム *、十和田市現代美術館、ROLEX ラーニングセンター *、豊島美術館、軽井沢千住博美術館、ルーヴル・ランス *　等。（* は SANAA として妹島和世との共同設計及び受賞）

軽井沢千住博美術館
DAICI ANO ©HIROSHI SENJU MUSEUM KARUIZAWA

十和田市現代美術館　撮影：西沢立衛建築設計事務所

TOPICS/INFORMATION

「大きな門の家のリノベーション」

①全景。門扉、化粧型枠の打ち放しのコンクリート塀②既存門柱をベンチに利用③一枚天板のＬ字型キッチン

改修デザイン：高田事務所
工事日程：2014 年 11 月～2015 年 1月
撮影：アック東京

昨年 11 月より今年 1 月まで、都内の大きなお屋敷の離れの和室を、洋室のLDK に改修する工事を行いました。また、大谷石の塀と白御影石の門柱、そして老朽化した門扉を、地震対策のため、杉板型枠のコンクリート塀と電動式の両開きの門扉に改修しました。これまで車の出入の際、門扉の開閉に苦労されていたお客様でしたが、リモコンスイッチで簡単に大きな門扉が開閉できるようになりました。現場担当主任、柴田の報告です。
（今回の before 写真はお客様の希望により掲載しておりません）

◆工事内容

①門扉新設
以前の大谷石の塀は、歴史を感じさせる大変立派な塀でしたが、風化等により随分と劣化が進んでいました。また門扉（スチール製）も大きく、重厚で、石柱に取り付けていた丁番の劣化が著しく、動かしている最中に転倒する危険が出ていました。苦労したのは、既存大谷石の撤去です。お客様のお祖母様の話では「１ｍぐらい埋まっているらしい」とのことでしたが、果たして現実のものとなりました。現状地盤面から約 1m30cm、掘り起こしました。そして苦労したのはその既存門柱の生かし取りです。まるで、石の採掘所みたいにドリルで穴を等間隔に開け、楔を打ち込んでやっと割ることができました。

②和室からリビングダイニングへの変更
リニューアル以前は、畳が敷いてあり、壁も聚楽壁で、純和風な感じの居間でしたが、今回は床をフローリングに替え、床暖房を全体に敷き詰めています。壁は、改修前の聚楽のベージュ系からマジックコートのインテリア仕上げで色を白に変えています。天井は、布クロスから和紙張りに。こちらも、ベージュ系から白系に変わっています。また、キッチン側の壁、押入れを撤去することで、キッチンとの隔たり感がなくなり、以前より、空間が広くなりました。

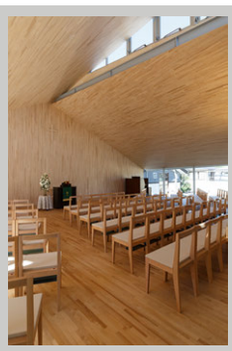
③キッチン改修
以前、増築工事をした時の軸組図を参考に梁の位置を想定して補強を考えていたのですが、いざ、壁を壊してみたら、筋交いの位置が逆だったり、無いはずの梁が出てきたりして、構造補強に手間取りました。キッチンの天板は、当初、構造柱が移設できないとの考えから 2 分割だったのですが、問題の構造の柱を壁の中に移設することにより継ぎ目のない天板が可能になりました。問題は、現場内に大きな天板を取り込めるかということです。この難題、意外とすぐに解決しました。重いＬ型の一枚天板（2700＊3400）を 5 人がかりでえんやこら。なんとか納まりました。

工事の時期が冬で、職人の寒さ対策に頭を悩ませていたところ、隣地のマンションの一室を現場事務所として貸していただき、随分と助かりました。
皆様のお心使いに感謝しております。　（リニューアル部主任　柴田）

「生田教会」が『新建築 2015．３月号 』、『GA JAPAN133 』に掲載されました

『GA JAPAN 133』では、表紙を「生田教会」が飾っています。バックナンバーの 126 号、127 号、132 号でも設計プロセスについての記事が掲載されています。あわせてご覧ください。

構造：Ｓ造　規模：地上２階
用途：教会
設計：西沢立衛／西沢立衛建築設計事務所
竣工：2014 年 9 月



撮影：アック東京

「S 邸 新築工事」　地鎮祭　2015 年 2 月 25 日

ご夫婦と３匹の愛犬が楽しく暮らす家を建築させていただきます。

構造：RC 造
規模：地下 1 階、地上２階
用途：専用住宅
設計：ピコグラム建築設計事務所
完成予定：2015 年 11 月

「駒沢の住宅　新築工事」上棟式　2015 年 1 月 31 日

環状７号線からほど近い、閑静な住宅街に建つ、全面タイル貼りの住宅です。

構造：WRC 造
規模：地上 3 階
用途：専用住宅
設計：現代計画研究所
完成予定：2015 年４月

編集後記

・取材に訪れた西沢立衛建築設計事務所は、「SANAA」と同じ場所にあるのですが、辰巳の大きな倉庫の中、「設計工場」といった雰囲気で、外国人を含めた大勢のスタッフの皆様が、本棚で仕切られたそれぞれのブロックで作業されていました。西沢先生も、取材後すぐに NY, そして地球の裏側の国へ出張ということで、世界的にご活躍されている様子がひしひしと伝わってきました。

(株)辰 通信　Vol.180　発行日　2015年3月18日　　編集人：松村典子　発行人：森村和男
東京都渋谷区渋谷3-8-10　TEL:03-3486-1570 FAX:03-3486-1450　E-mail：daihyo@esna.co.jp　URL :htt p ://www.esna.co.jp